

## 解答

一

① 切望

② 気位

③ 思案

④ 親善

⑤ 奮起

二

① えり

② きぬ

③ げた

④ めがね

⑤ そで

三

問一 もうすぐ出番なのに、ふみちゃんがピアノの演奏をかたくなに拒んでいるから。

問二

問三

問四

問五

問六

問七

問八

問九

問十

四

問一

X Y

イ キ

問二

問三

問四

問五

問六

問七

自分自身のことを客観的に分析できず、過大評価しがちだから。

「欲」は人間にとって「生命力の根源であり、その強度の違いがその人の個性となるが、一人前として立派に通ずる大人になるためには、常に社会を意識し、時と場合にに応じて欲を調節するべきだ。

## 解説

三 出典は、辻村深月「ぼくのメジャースプーン」。

問一

傍線部①の四行前で「ぼく」はふみちゃんに、「何してるの？ 早く行こうよ。ふみちゃんの順番、もうすぐだよ」と声をかけますが、ふみちゃんは「嫌です、と意思表示をするように」、「黙ったまま、首を振」ります。もう一度声をかけても、ふみちゃんの反応は変わりません。ふみちゃんの態度が今のままでは、「ふみちゃんの出番が来ても」、「間に合わなくなってしまう」います。このことで「ぼく」は「困ってしまった」のですね。

問二

傍線部②の前の段落に書かれたふみちゃんの表情に注目します。「顔も真っ赤」で、「目が、泣き出しそうな色をしている」ようです。今までどんなことがあっても「一度だって泣いたことがなかった」ふみちゃんの泣きそうな表情を初めて見たときの「ぼく」の心情を考えましょう。

問三

傍線部③の五行前でふみちゃんは「ぼく」に、「あの子の後に……ピアノ弾くの、やだ」と言いますが、その後ふみちゃんは「ぼくに話してしまったことを後悔するようにまた俯い」て、「顔が耳まで真っ赤にな」ります。どうやらふみちゃんは「恥ずかしくてたまらない」ようです。その理由は、同じページの後半でふみちゃん自身が話しています。演奏のうまい「あの子」の後で演奏すると、「ふみが、みんなにつきはぎだらけのボロボロだって、ばれちゃうよ。どんなに難しい曲を弾いても、みんなにわかっちゃう」ことを気にしているから、ふみちゃんは演奏会に出たくないのですね。その心境を「ぼく」に話してしまったことが、「恥ずかしかった」のです。

問四

傍線部④の後に注目します。「ぼく」は、「いつも毅然として自信家なふみちゃんが、自分のことをそんな風に（＝自分の演奏をつぎはぎだらけのボロボロという風に）思っていることに驚いて」、その場を動けなくなってしまうのです。

問五

A・B・Dは、それ以前の演奏者と比べて「ふみちゃんの直前に演奏している男の子」が段違いに上手なことを示し、Eは、「男の子」の演奏が、演奏会場にあるピカピカしたピアノにふさわしいことを示しています。

問六

問五と関連つけて考えましょう。A・Bの部分で今までは違うピアノの音色に気づいた「ぼく」は、その演奏

に心を奪われて「思わず床に顔を向け」ました。その後しばらく、D・Eの部分に代表されるように、「ふみちゃんの直前に演奏している男の子」の演奏に聴き入っています。傍線部⑥の直前でふみちゃんに声をかけられるまで、この状態は続いていますね。

問七 傍線部⑧の直後から、「ふみちゃんに逃げてほしくなかった」理由が書かれています。「正しいことをしよう」と、いつも「一生懸命」になるふみちゃんだからこそ、「今日ここで逃げたことを多分ずっと引きずって、何度も何度も思いついて苦しむだろう」と「ぼく」は考えています。だから「ぼく」はふみちゃんに、「いつも堂々としてほしいんだ」と伝えるのです。

問八 問二・三などでも確認したとおり、普段のふみちゃんはいつも毅然としていて、自信家でした。そんなふみちゃんが、ピアノの上手な「男の子」に勝てる自信をなくし、「どうしようもないから、負けを認めて逃げようとして」(傍線部⑦の直前) います。問七でも確認しましたが、何にでもまっすぐぶつかるあまり、苦悩するふみちゃんの姿を、「ぼく」は初めて見てしまったのです。

問九 今まで「友だちができない」が「一人だって平気」(傍線部⑧の直前) と思われていたふみちゃんでしたが、実際は友だちのいないことに気にしていたようです。「ぼく」の「ぼくはふみちゃんと仲がいいことが自慢なんだ」という言葉を受けて、「ふみちゃんの目に、不思議な光が浮か」び、「それまでずっと宙だけを睨んでいた目がゆっくりとぼくの顔を見」ます。ふみちゃんは「ぼく」の言葉に喜びを感じますが、まだ半信半疑です。だから、傍線部⑨の後にあるように、「本当?」「ふみと仲がいいことが自慢だって」と聞いたのですね。

問十 前半の問いでも確認したように、ふみちゃんは二重線Xの部分では、ピアノの演奏をかたくなに拒んでいるようです。しかし、問九などで確認したように、「ぼく」が本当にふみちゃんと仲がいいことを自慢していると確認したことを受けて、演奏会に出場しようと決心します。ふみちゃんにすれば、「ぼく」の存在は心の支えになるわけです。つまり、自分はひとりぼっちではないということに気づいたのですね。

四 出典は、山崎武也「凜とした人、卑しい人」。

問一 本文の最初から空欄の直前までをよく読みましょう。世の中の理不尽な物事に対して、「自分の意見や考え方を発信する術はあるのだが、当事者が真摯に対応してくれることは非常に稀」なのです。つまり、「自分の意見を発しても効果が無い」ということですね。この意味を持つことわざを選びましょう。

問二 「不得手」は「得意でない、苦手」、「忌憚らない」は「遠慮のない」という意味です。

問三 「自衛」は「自らの力で自らを守ること」という意味です。「歩道を疾走する自転車」などの「無法者」から自分を守るため(＝「無法者」からの被害を防ぐため)に、筆者は「前後左右に全神経を張りめぐらせ」ています。

問四 傍線部②の直後を読めば、「あてはまるもの」を消去できます。「その場における自分の欲のみに従って行動する」(↓オ)、「その場の状況や周囲の人たちの意などは無視して、我がまま放題に振る舞おうとする」(↓エ)、「ないものねだりをしたり、だだをこねたりする」(↓ア・ウ)。

問五 傍線部③の直前に、「自分や周囲の人たちだけではなく、広く人類全体についても、多少なりとも時々は考えているか」とあります。「自分や周囲の人たち」・「人類全体」の将来にどういう影響を与えるかを考えて行動しているかをもう一度確認せよ、と筆者は考えているのですね。

問六 傍線部④の次の段落の要点をまとめる問題です。人は自分自身のことを「どうしてもひいき目で見える」(＝自分を客観的に見ることができない) ことが多く、自分を「過大評価」しがちです。これでは危険なので、自分の思いこみだけで自分の得手・不得手を判断するのではなく、ほかの人から客観的に見てもらうべきだ、というのが筆者の考えです。

問七 まず書き出しの『欲』は人間にとって「つながる表現を考えます。最後から二つめの段落に「自分の生命力の根源となっているいろいろな欲」とありますが、ここから「欲は人間にとって生命力の根源だ」といえそうです。さらに最終段落の「それぞれの欲の強度については、人によって異なっている。その違いが、人の個性となって現れている」の部分から、「欲の強度の違いが、人の個性だ」ともいえます。ただし、欲をそのまま表に出すのではなく、「その(＝欲の)調節を、常に社会を意識しながら、時と場合に応じて上手にできるようにすれば、一人前として立派に通用する人となる」と述べています。この部分にも注意して、解答をまとめましょう。聖光学院の場合、問題用紙に「下書き欄」もついています。普段記述問題を練習するときにも、「下書き」を意識して下さい。これは、日本語として整った解答をまとめるために、非常に重要なことです。